

私を形作った北野山岳同好会

～山岳同好会懇親会開催に寄せて～

にししか かずひろ
23期 西阪 一裕

J Rのある駅に1枚の山岳写真が掲出されています。

大正池から見える奥穂と前穂に架かる吊り尾根と岳沢の風景で一般的なものである。

その吊り尾根は、昭和35年北野(定)に入学してすぐの夏、授業の一環だったのか、わからぬままに誘われて涸沢～奥穂～前穂～岳沢へと歩いたところで、後の生活に少なからず影響を与えられた初恋の場所でもありました。

通勤途中など、この写真を見るたびに学生時代に登った山、共に歩いた多くの友、お世話になった方々はと思いをはせていた昨秋、山岳同好会懇親会を12月3日に開催するとの案内状を頂き参加いたしました。

昭和35年当時の山岳同好会には多くの生徒が在籍しておられ、毎月の例会登山、文化祭での山岳写真の展示等、活気ある行動を行っていました。

その一つが、同好会誌「会報」の発行で、各自が原稿を持ち寄り、35年12月に初刊、その後3刊まで発行しました。

この度の懇親会での話題作りでもと思い「北野定時制72年史」をひもといたところ、初刊への寄稿者が29名であったことを知りました。そしてよく見ると今回の懇親会に参加いただいた23名のうち13名の方が初刊に寄稿されているではないか。!!

まさに驚きで、同好会で育んできた友情が卒後50余年を経過しても色褪せることなく、遠方からも懇親会に参加していただけるのは、強い絆で結ばれているものと痛感し、同好会の一人として幸せなひと時でありました。

話題を少し変えて、最近の登山は道路や鉄道の整備に伴い、「手軽に早く」と、ピークハンターのごとく強行登山的な状況を見受けることが少なくありません。

往時の信州へは夜行列車から始まり、急行「ちくま」に乗るため大阪駅のコンコースで並ぶことが常であった時からは、現在は真に隔世の感がします。

老いた脚には登山などは無理なこと、アナログ的な散歩が似合うのか。

吊り尾根がいつまでも気高き清廉で、訪ねる人を迎えていただきたいと願うのは私一人でしょうか。

老人が一人、恋人を求めて湖畔を訪ねるのも一興かなと思いを馳せるこの頃です。

♪♪ 枯葉散る夕暮れは、来る日の寒さをものがたり ♪・・♪
恋人よ、そばにいて、こごえる私のそばにいてよ ♪・・

山岳同好会を育み、ご指導を頂いた教職員の皆様、多くの諸先輩の皆様に書面をお借りして厚くお礼を申し上げます。



23期同期会にて 右端、西阪さん